



Title	高齢期におけるValuation of Life(VOL)：未来へのポジティブな評価に着目して
Author(s)	中川, 威
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/51868
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

〔 題 名 〕

高齢期における Valuation of Life(VOL)-未来へのポジティブな評価に着目して-

学 位 申 請 者 中 川 威 印

第 1 章 序論

年をとり、体が衰えても、それでも人は生きていたいと思うのだろうか。本論文では、この問いに答えるため、Valuation of Life(以下、VOL と略記する)に着目した。

VOL は“これからも生きたい”という未来へのポジティブな評価を捉える、近年新たに提唱された幸福感である。既存の枠組みでは、健康が損なわれれば幸福感は低下すると考えられてきた一方、VOL は健康に必ずしも規定されない幸福感を捉えているとされ、高齢期において健康が損なわれても VOL は維持されうると考えられてきた。しかし、VOL に関する知見は十分に蓄積されているとは言い難い。そこで、本論文では、VOL の年齢差および加齢変化、そしてその規定因子を明らかにすることを目的に一連の研究を行った。

第 2 章 Valuation of Life の測定

VOL を測定する日本語版尺度は作成されておらず、測定尺度を作成する必要があった。また、高齢の調査参加者にかかる負担が少なくなるよう、項目数や各項目の評価段階を減らすことが求められた。そこで第 2 章では、VOL を測定する日本語版尺度(研究 1)および短縮版尺度(研究 2)の作成を行った。その結果、VOL の日本語版尺度および短縮版尺度について一定の信頼性・妥当性を確認できた。結論として、原版尺度に含まれていた 2 項目を除く 11 項目から成る日本語版尺度と、5 項目から成る短縮版尺度のいずれも使用できることが確かめられた。以降の章では、短縮版尺度を用いた。

第 3 章 Valuation of Life の横断研究

第 3 章では、VOL の平均値およびその規定因子の年齢差を、前期高齢期、後期高齢期、超高齢期という 3 つの年齢群を対象にした横断研究のデータに基づき検討した(研究 3)。まず、VOL の平均値の年齢差を検討した結果、超高齢期では後期高齢期よりも VOL は低くなるものの、その差分量は小さく、高齢期には VOL は比較的高く維持されると示唆された。次に、VOL の規定因子の年齢差を検討するため、社会人口学的要因、社会的要因、身体的要因、心理的要因を説明変数、VOL を目的変数とする階層的重回帰分析を行った。その結果、いずれの年齢群でも、心理的要因の説明率が最も大きく、社会的および身体的要因の説明率は小さいことが示された。心理的要因に関しては、性格特性である誠実性との関連が大きかった。また、超高齢期において心理的要因の説明率が高いことが示されるとともに、後期および超高齢期では、社会的要因が VOL と有意に関連していた。

第4章 Valuation of Life の縦断研究

横断研究と縦断研究とで一貫した結果が再現されるか確認するため、第4章では、VOL の加齢変化およびその規定因子を、前期高齢期を対象にした3年間の縦断研究のデータに基づき検討した(研究4)。まず、VOL の加齢変化を検討した結果、VOL はわずかに低下するものの、その変化量は小さかった。ゆえに、高齢期にはVOL は比較的高く維持されることが示唆された。次に、VOL の加齢変化の規定因子を検討するため、一連の重回帰分析を行った。その結果、心理的要因、社会的要因、身体的要因のそれぞれが独立して3年後のVOL に影響していることが示された。また、VOL の変化の規定因子に関しては、社会人口学的要因および身体的要因の変化が影響していることが示された。すなわち、経済状況とIADLの低下がVOL の低下と関連していることが示唆された。ただし、規定因子の変化の役割は小さかった。

第5章 Valuation of Life の国際比較研究

幸福感の規定因子は社会文化的文脈によって異なることが指摘されている。高齢期においては、自立が重視される西欧文化では調和が重視される東アジア文化よりも、健康の低下によって自立した生活を送ることが困難になれば、幸福感は顕著に低下すると考えられる。しかし、VOL の規定因子の文化差は検討されていない。そこで、第5章では、VOL の平均値およびその規定因子の文化差を、日本とドイツの二国間比較研究のデータに基づき検討した。なお、測定尺度の質問項目が二国間で等価かについても検討した(研究5)。分析1では、二国間での比較を行うにあたって、短縮版尺度の二国間の測定等価性について確認した。多母集団同時分析の結果、5項目中4項目への反応は二国間で等価であることが示された。また、項目反応理論による項目分析の結果、VOL が低い日本の高齢者は、“困難に出会ってもなんらかの方法で切り抜けられると思う”という項目に対して“いいえ”と回答しない傾向があることが示唆されたため、以降の分析では二国間で差異が認められた項目を除く4つの質問項目の合計得点を算出し、分析に用いた。分析2では、VOL の平均値の文化差を検討するため、分散分析を行った。その結果、ドイツの高齢者は日本の高齢者よりもVOL が高かった一方、いずれの国でも年齢差はみられなかった。さらに、VOL の規定因子の文化差に関して、一連の階層的重回帰分析の結果、ドイツよりも日本で、前期高齢期では社会人口学的要因とVOL の関連は大きく、後期高齢期では身体的要因とVOL の関連は小さいことが示された。結論として、西欧文化では東アジア文化より自立を重視するため、日本ではドイツよりも身体的要因とVOL の関連は小さいという仮説は支持された。

第6章 総合考察

本論文では、年をとり、体が衰えても、それでも人は生きていたいと思うのかという問いに答えるため、一連の研究を行った。結論として、問いに対して“はい”と肯定する答えを支持する結果が得られた。高齢期においてもVOL が比較的高く維持されることを支持する結果が得られた理由のひとつは、VOL が時間と状況による変化が小さい特性的概念であるためと考えられる。しかし、“いいえ”と否定する答えが完全に棄却されたわけではない。縦断研究(研究4)の結果、前期高齢期では、VOL が低下した者が少数ながら確認され、経済状況の悪化あるいは健康の低下によって人生は生きるに値しないと評価しうることが示唆された。また、二国間比較研究(研究5)の結果、自立を重視する国では健康の低下の影響が顕著になりうることが示唆された。ただし、本研究では、前期高齢期を対象に3年間という追跡期間での調査を行うに留まった。今後、より長期間におけるVOL の変化を明らかにするために、後期および超高齢期も対象に含めた、より長期間に渡る縦断研究を行うことが必要であろう。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (中 川 威)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	教 授
	副 査	教 授
	副 査	准教授
		佐 藤 眞 一
		斉 藤 弥 生
		権 藤 恭 之

論文審査の結果の要旨

高齢者の幸福感に関する研究は、老いをネガティブなものと捉える常識的な信念への挑戦へと駆り立てられた研究者によって、すでに半世紀以上の実証研究の歴史がある。一方、1990年代から急速に広まりつつあるポジティブ心理学による諸研究によって、幸福感の精緻な理論的および実証的研究が蓄積されてきた。老年学においてもSuccessful Agingの再定義が繰り返されるなど、超高齢時代に相応しい老年期の幸福とは何かを問う研究はさらに増加している。

そのような背景の中、本研究は、M. Powell Lawtonが、主観的余命とは異なる未来へのポジティブな自己評価とそれに伴う感情を、健康が損なわれたとしても観察可能な幸福感と捉えたValuation of Life（以下、VOLと略）の概念と操作的な指標が、我が国の高齢者にも適用可能かを、ドイツ人のデータとの比較を含む横断的および縦断的実証研究から明らかにすることを目的に行われた。

研究1 では、高齢者を対象に質問紙調査が行なわれ、VOL の測定尺度の信頼性・妥当性を検討された。その結果、ポジティブVOL とスピリチュアルwell-beingの2因子構造が示された。また、ポジティブVOLは精神的健康との関連がみられたが、スピリチュアルwell-beingの関連性は弱かった。次いでVOLの規定要因が検討され、ポジティブVOL は社会的要因、身体的要因と有意に関連するものの、説明率は小さいことが示された。また、スピリチュアルwell-beingは道徳や宗教と関連することが示された。さらに、VOL が主観的余命を規定するという仮説を検証するため、主観的余命を目的変数とする重回帰分析を行ったところ、ポジティブVOL のみが主観的余命と有意に関連していた。以上より、高齢期における幸福感を測定するためには、ポジティブVOL のみの使用が望ましいと結論づけられた。次いで行われた研究2において高齢者が回答する際の負担軽減を主な目的とした短縮版尺度が作成された。

研究3では、VOL の平均値およびその規定因子の年齢差を、前期高齢期、後期高齢期、超高齢期の3 年齢群についての横断データに基づき検討された。その結果、高齢期にはVOL は比較的高く維持されると示唆された。次に、VOL の規定因子の年齢差を検討したところ、年齢群間の共通点として、心理的要因の説明率が最も大きく、社会的および身体的要因の説明率は小さいことが示された。これらの結果から、VOL は時間と状況による変化が小さい特性的概念であることが示唆された。一方で、後期高齢期以降では社会的要因とVOL が関連していたが、その理由として、社会的要因は加齢に伴って必ずしも損なわれず、比較的維持され、残存資源として重視されたためと考えられた。

研究4では、VOL の加齢変化およびその規定因子が、前期高齢期を対象にした3 年間の縦断研究のデータに基づき検討された。その結果、VOL はわずかに低下するものの、その変化量は小さかった。ゆえに、高齢期にはVOL は比較的高く維持されることが示唆された。次に、VOL の規定因子の変化が検討されたが、VOLの変化に対するその役割は小さかった。以上の結果から、VOL は時間と場所による変化が小さい特性的概念であることが改めて示唆された。

研究5では、VOL の平均値およびその規定因子の文化差が、日本とドイツの比較データに基づいて検討された。その結果、ドイツよりも日本で、前期高齢期では社会人口学的要因とVOL の関連は大きく、後期高齢期では身体的要因とVOL の関連は小さいことが示された。結論として、西欧文化では東アジア文化より自立を重視するため、日本ではドイツよりも身体的要因とVOL の関連は小さいという仮説は支持された。

本研究では、一般に老年期の幸福感として評価される過去回想および現在の心身の状態とは異なる、未来展望を基礎とした幸福感研究の我が国への適用可能性が、大規模調査を繰り返して検討された。データとしての貴重性とともに、縦断研究および国際比較研究による検討内容を吟味したところ、理論的貢献度も優れていると評価し、本論文は博士（人間科学）の学位授与に値すると判定した。

